

# 3: 機会費用、相対価格

ミクロ経済入門・ミクロ経済学の考え方  
赤井伸郎

本資料は、この講義の前任者である室岡先生の資料をベースに加筆修正したものである。

# 概略：費用とはなにか？

- ・ 物の（例：ペットボトルのお茶）を買う場合
  - ・ いくらなのか、買うのにどのくらいの時間がかかるのか、他の飲み物（例：同じ容量のペットボトルの炭酸飲料）の価格はどうか
- ・ アルバイトをする場合
  - ・ 他のアルバイトより儲かるのか、自分の為になるのか、楽しいのか
- ・ どうやって一般に「費用」を測るのか？

# 費用の例：映画鑑賞

- ・ある映画を見に行く際にかかる「費用」とは？
  - ・映画館の代金（1500円）
  - ・往復の交通費（300円）
  - ・映画を見に行くことの時間（往復の交通も含め3時間）
  - ・映画館までの往復による心理的・肉体的疲労（心理的・肉体的疲労が改善する場合はマイナスの費用として考える）
  - ・・・・
- ・映画鑑賞の費用は上記をすべて見積もったもの！



# 機会費用

# 機会費用とは？

- ・「何かを入手するために犠牲にしなければならないもの」
- ・「意思決定に際して考慮すべきマイナス面」
- ・「その資源（お金、労働力、生産設備など）を他の用途に使ったときに得られる最大の収益のこと」

# 機会費用の例：労働

- ・ 時給1000円のアルバイトを1時間する際に犠牲にしたものは何か？
  - ・ 1時間分休んだ時の、心理的・肉体的疲労回復の便益
  - ・ 1時間本を読んだ時の、楽しい・賢くなる・勉強が進む便益
  - ・ 1時間友達と遊んだ時の便益
  - ・ …
- ・ 機会費用は、他に取り得た選択肢全てのうち最大のもの
  - ・ 人・時間・状況によって「時給1000円のアルバイトを1時間」する機会費用は全く異なってくることに注意！
    - ・ 前回スライドにある「留保利得」は、より正確には「その契約を結ぶことの機会費用」により決定される。

# 機会費用を考えることの重要性

- ・機会費用をよく考えないと、間違った選択をする可能性がある。
- ・例：専門家（弁護士・大学教員など）と一般事務作業
  - ・ある専門家が、仕事を追加的に1時間行うことにより6000円稼げるとする。
  - ・この専門家が、一般の事務員にもできる事務作業を済ませる必要がある状況を考える。
  - ・この人は事務作業も得意なため、一般の事務員なら40時間かかる作業を10時間で終わらせられる。どうすべきか？

# 機会費用を考えることの重要性

## ・例の続き

- ・ もし一般の事務員を平均時給1500円未満（事務員を探す労力・コストなどもここに含む）で雇えるなら、この専門家は自分で事務を行うより、一般事務員を雇って浮いた時間（10時間）仕事を行った方が、最終的な便益が増加する。
  - ・ ここでも、相対的な比較が重要！！
- 
- ・ よりよい意思決定のためには、失われる機会を評価することが必要である。



# 相对价格

# 相対価格とは？

- ・ **ミクロ経済学では「相対的な」比較がしばしば重要となる。**
  - ・ **例：手取り月収30万円で平均物価水準が現状の場合と、手取り月収150万円で物価が全て5倍になった場合は、購入できる財の組み合わせは同じまま。**
- ・ **財価格も、絶対的な価格（例：ペンは100円、消しゴムは50円）だけでなく、相対的な価格（例：ペン1個は消しゴム2個分の価格）が重要！**

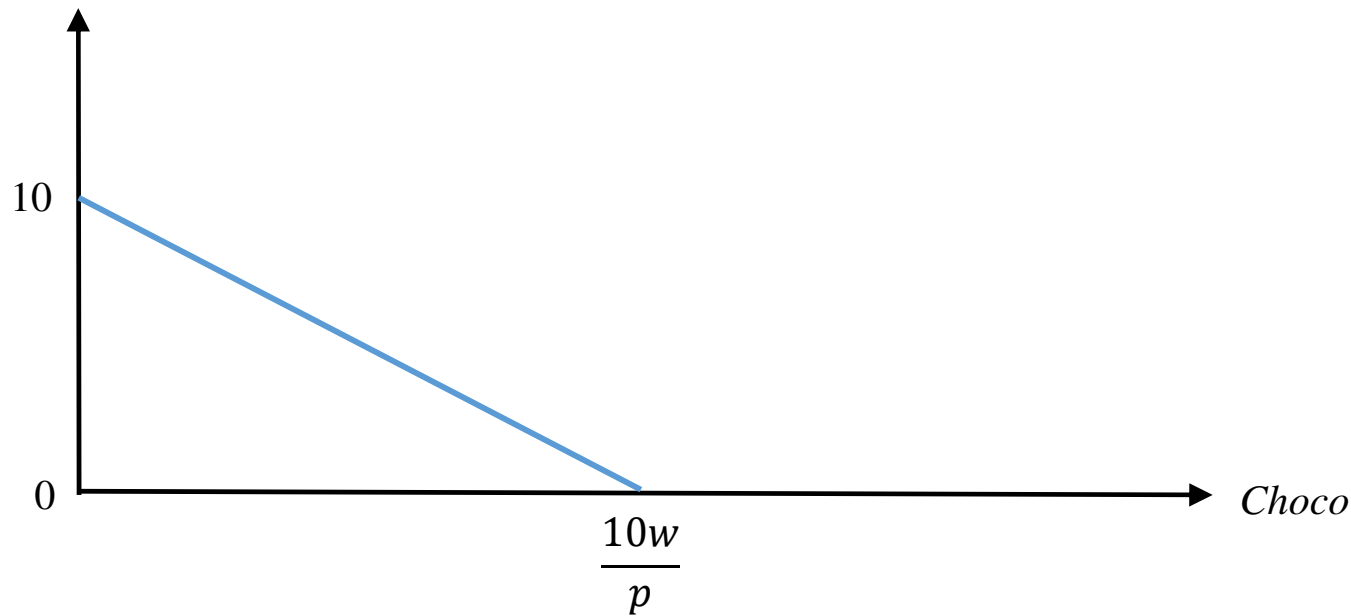
# 相対価格の例：労働

- ・ ある一日の活動を考える。活動時間が計10時間あり、時給 $w$ 円 (wage)のバイトをするか、余暇を過ごすかを選ぶ。
- ・ 何時間バイトをして、どのくらい余暇が欲しいか？
- ・ 以下で使う例：
  - ・ アルバイトのお金は、すべてチョコレートを買うことに使うとする。チョコは沢山食べれば食べるほど嬉しいとする。
  - ・ アルバイトそれ自体より、余暇の方が楽しいと仮定する。
  - ・ 余暇も (チョコレートとは別の) 消費財だとみなす。



# 消費可能性集合のグラフ

- ・ チョコの価格を  $p$  (price)、余暇に配分した時間を  $L$  (Leisure)、労働時間を  $X$ 、チョコの数を  $C$  とする。  $wX = pC$  が成立することに注意。よって、消費可能性集合は  $(L+X=) L + \frac{p}{w}C = 10$  で表される。



# 相対価格の例：労働

- ここでwageおよびpriceは、それぞれの絶対価格よりも相対価格  $\frac{p}{w}$  が重要なことに注意!
  - 価格が1個100円で時給1000円の時と、価格が1個500円で時給5000円の時は、消費可能性集合は同一。
- 相対価格  $\frac{p}{w}$ : チョコ1個の労働時間あたりの価格
  - 価格が100円で時給1000円の時は、チョコ1個は0.1時間分の労働に相当する
  - 価格が2000円で時給1000円の時は、チョコ1個は2時間分の労働に相当する

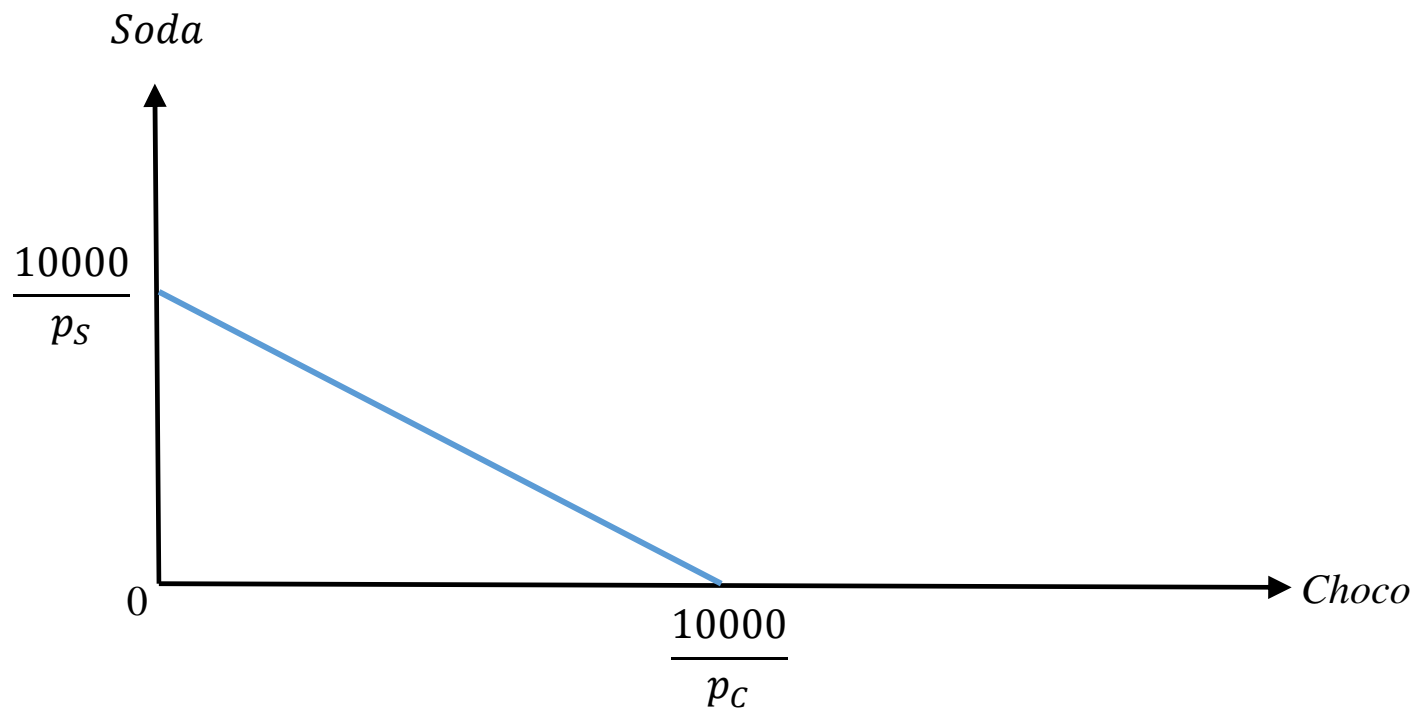


# 相対価格の例：複数財の消費

- ・ 所得10000円をチョコとソーダの二財の消費に使い切るような状況を考える。
- ・ チョコとソーダ、それぞれどれだけ欲しい？
- ・ 以下で使う例：
  - ・ チョコもソーダも沢山消費すれば消費するほど嬉しいとする。

# 消費可能性集合のグラフ

- ・ チョコの価格を  $p_C$ 、ソーダの価格を  $p_S$  とする。先の状況をグラフで表すと： $p_S S + p_C C = 10000$ .



# 相対価格の例：複数財の消費

- ここでも相対価格  $\frac{p_C}{p_S}$  が重要なことに注意!
- 相対価格  $\frac{p_C}{p_S}$ : チョコ1個を諦めることにより、ソーダを何個買えるか。
  - チョコもソーダも100円の場合は、ソーダ1個はチョコ1個分に相当する。
  - チョコが100円でソーダが200円の場合は、ソーダ1個はチョコ2個分に相当する。
- 相対価格は、トレードオフ(何かをより求めるとき、他方はどのくらい犠牲になるか)を表すのに便利!

# まとめ

- ・ よりよい意思決定のためには、それぞれの行動において失われる機会を評価することが必要。
- ・ ある物を手に入れるときに、他の物をどのくらい諦めなければいけないか、というトレードオフについて考える。